アプサラサス登頂（1976年）

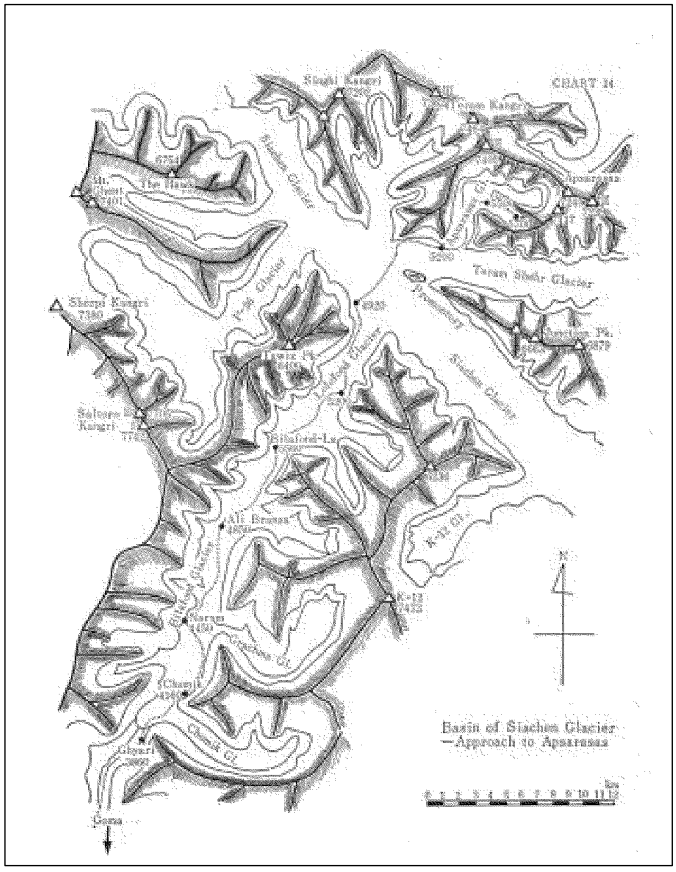
石原敏雄

はじめに

P29 峰に 4 回の遠征隊を送り出し、1970 年に宿願の初登頂を果した大阪大学山岳会のヒマラヤへの情熱は、若い会員達に受け継がれていた。ヒマラヤへの憧憬はいよいよ強く、夢はますます大きくふくらんでいた。シアチェン流域の 7,000m以上の処女峰を狙っていた我々に、1976 年 2 月、パキスタン政府より第一志望のアプサラサス登山許可を得た。夢はついに現実となった。

アプサラサス登山の計画段階で次の 2 点がもっとも議論された。まず、登頂ルートの選定であった。静岡大学隊、神戸大学隊から西面の写真を頂き、アプサラサス氷河内院から南稜に、可能性の高い登路を想定した。しかし、東面には未知の要素が多く、東面の偵察も不可欠とした。つぎに、長いアプローチに伴う輸送上の困難が予想された。これらは我々を悩ませる問題であると同時に、アプサラサス登山を一層魅力あるものにした。

以上の 2 点を踏まえて、登山計画を具体的に検討し、次のような原則にもとづいて準備を進めた。軽装備の機動力豊かな隊で、長いアプローチの輸送を少人数で敏速かつスムーズに行い、この間に予定している東面の偵察などに適宜柔軟に対処しようと考えた。また、AC を頂上近くに設け、ローテーションによる全員登頂を計画した。国内の冬山行に準じた装備を用意し、歩荷の安全確保の為に南稜ルートに予想される長さの固定用ロープを準備した。BC までは現地購入の食料を優先させ、登山期間の食料は徹底的に軽量化をはかった。この結果、味覚、カロリーなどは二次的なものになってしまった。このような基本計画は、我々の乏しい資金面からも好都合であった。



アプローチ

ビラフォンド峠を遠望できるナラムに、我々のキャラバンが到着したのは 6 月 1 日だった。本隊が 5 月 3 日にパキスタンに入国してから、わずか 1 ケ月たらずの敏速な行動だった。隊員 8 名、連絡将校 1 名、コック 1 名、人夫 92 名で構成されたキャラバンが、カパルを出発してから 9 日目のことだった。もう 1 日行程のアリブランサまでのキャラバンは、残雪の多いことを理由に、連絡将校がカパル以来反対していた。見たところ、アリブランサまで、モレーン伝いに容易に行けそうだったが、ナラムがキャラバン最終地になってしま

った。ビラフォンド峠への荷揚げに、20 名の人夫を雇った。彼らに食料を支給し、テント、若干の装備を貸与した。

翌日より荷揚げが開始された。隊員にとっても、本格的な登山活動の開始であった。4 日間でアリブランサ、さらに 8 日を要して峠までの荷揚げをほぼ完了した。ビラフォンド峠から BC までの隊荷輸送には、ロロフォンド・キャンプ、シアチェン・キャンプを中継地として、隊員と 7 名の人夫が従事した。この隊荷輸送にあてた 1 ケ月間に悪天で全員が停滞したのは、たった 1 日という好天に恵まれた。6 月 26 日に BC が建設され、7 月 2 日にはすべての物資が集結した。連絡将校はアリプランサよりゴマに下って、我々登山隊の帰りを待つことになった。

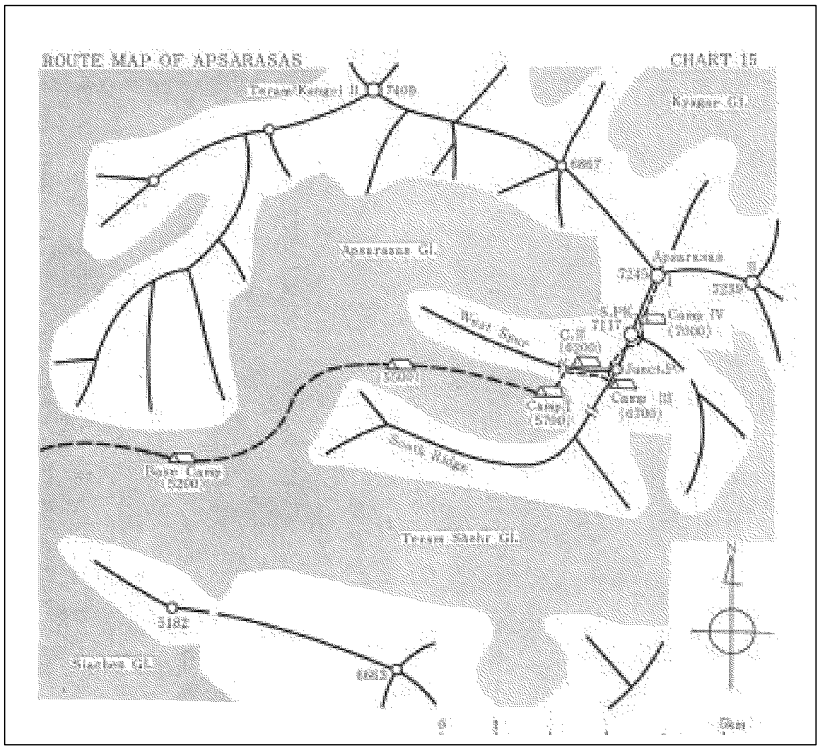
登　路　決　定

アプサラサス氷河内院に C1 を設けるべくルート偵察が行なわれた。アプサラサス氷河の入口には高度差 200m 程のアイス・フォールがあり、大きなクレバスが口を開けていた。3 個所でアルミ梯子を利用してクレバス帯を抜け、南稜末端を北側に廻り込んだ内院に、7 月 3 日に C1 を設けた。ここはアプサラサス西面の登路観察には絶好の地点であった（添付写真参照）。

ビラフォンド峠を越えてから、正面に聳えるアプサラサス山群の登路観察を続けた。南峰から伸びる南稜および、東に派生した顕著な支尾根にテラム・シェール氷河から登路を求めることは、頂上までの距離が長いように見えた。さらに、東面偵察の日程的な余裕も無くなり、当初の計画どおり、西面に登路を求め、アプサラサス氷河内院に C1 を設けた。

C1 から西面のルートを詳しく偵察した。南稜のジャンクション・ピナクルから上部は、南稜を辿って南峰に到り、そこから吊り尾根のような主峰と南峰のコルを経て容易に主峰に達せられそうに思えた。

ジャンクション・ピナクルまでは南稜のコルからリッヂを登るルートと、ジャンクション・ピナクルへ突き上げる西稜を登るルートの二つが考えられた。南稜のコル直下にある、急傾斜の氷壁には、小さな懸垂氷河が幾つかあるが雪崩の痕跡は無かった。アイゼンの前爪が心地よく喰い込む硬さの氷壁に、コルに達するルートを拓くことはさほど困難とは思えなかった。一方、南稜のジャンクション・ピナクルから派生した西稜は、アプサラサス氷河の内院へ急激に落ち込み、その末端は再び盛り上って、内院を二分していた。この西稜の上部は、南稜と一体化した幅広い雪面で始まり、急峻な岩稜が南に分岐するジャンクション辺りから明瞭な雪稜となって下る。西稜の中程に、下部に広い雪壁を持つ大きな懸垂氷河が掛り、その下は痩せた岩



稜に繋がり、西稜のコルまで一気に落ち込んでいた。南稜コル下の氷壁に比べて、雪崩の安全性に差異はないが、歩荷には技術的な困難個所が予想された。しかし、ジャンクション・ピナクルまでほぼ全ルートに固定ロープを設置すれば、数ケ所のテント地や休憩地が得られそうに見えた。多少の迂回ルートにはなるが、歩荷に適すると判断し、登頂ルートをこの西稜に決定した。

登　攀・登　頂

7 月 8 日には、C1 の荷揚げが完了し、BC は、若干の帰路用食料などを残して撤収された。人夫は、8 月 12 日の再来を約して、黒いモレーンの上を飛ぶように帰っていった。いよいよ 8 名の隊員だけの登攀と歩荷が始まった。

翌日、C1 を側稜のコル直下に移動した。痩せた雪稜、懸垂氷河下の急峻な氷壁に、固定ロープは毎日少しずつ着実に伸びていった。午後の日射しをまともに受ける、西面に打たれたスノー・バーやスクリュー・ハーケンは、帰路と翌朝には必ず打ち直さなければならない程、氷雪の融解が著しかった。昼下りの帰路の雪稜では股下まで落ち込んだ。最初に出会った大きな懸垂氷河を右に巻き、雪に埋れた大きなクレバスの中に、C2 を設ける。C2 まで 700m のロープを固定した。

C2 から眺められるサルトロ・カンリ、K12 の南方から、モンスーンの襲来を思わせる雲堤が、だんだんと迫り、今まで安定していた天候は 7 月 20 日から大きく崩れた。気温は意外に高く、ぼたん雪の降る悪天候の中、C3 へのルートが拓かれた。C2 の直ぐ上の懸垂氷河には、歩荷用に縄梯子を固定して乗越し、西稜の岩稜のジャンクション手前まで雪面を登る。雪壁を横切るクレパスを渡り、さらに傾斜を増す雪面を登り詰める。次に出て来た懸垂氷河の下を、緊張を強いられる右方向のトラバースで南稜の雪稜上に出る。

C1 の 6 人用テントが放棄され、C2 に隊員が集結して、頂上攻撃態勢が整ったのは 7 月 24 日だった。翌々日には、ジャンクション・ピナクルの岩峰下に C3 が設けられた。この頃より気温は下り、強風に粉雪の飛ぶ日が多くなった。

7 月 28 日、曇天の朝、石原と吉田は C3 から比較的傾斜の緩くなった南稜を登り、風雪が強くなった天候の中、南峰直下の雪壁に登攀用ロープ 60m を固定して南峰の肩に達した。更に東面の雪壁を登り、14 時 30 分に南峰に初登頂した。頂上は、鋭い雪稜で、テラム側は垂直に切れ落ちていた。主峰と南峰のコルへは、南峰の肩から東面の雪壁のトラバースなら比較的容易そうであることをガスの切れ間に確認した。翌日と翌々日に AC 建設を試みるが、悪天のため途中で引き返した。毎日続く風雪のため食料は底をつき、C3 で AC 用食料の半分が使用された。

8 月 4 日、天候はわずかに回復の兆しを見せた。最後の望みを明日のアタックにかけ、三沢、栗原の途中までのサポートを受けて、C3 を出発した。天気はしだいに良くなってきた。われわれは南峰の東面をトラバースして、主峰と南峰のコルに AC を設け、石原、稲垣、宮本、吉田が AC 入りを果した。午後からは、久し振りに晴れ渡り、風も無く、国境稜線の向うに連なるチベットの山波が望まれた。この午後の好天を利用して、アタックすべきであったかもしれない。

翌日、翌々日は、テントから一歩も出られない程の嵐が続いた。石原、吉田の二人用 AC テントは雪で埋め潰されて、二晩目には横たわるスペースさえも無くなり、2 人とも座った姿勢のまま朝を迎える。6 日朝、最終的な撤退命令がトランシーバーで伝えられた。嵐の咆哮の中、AC を放棄して下山を開始した。

ところが、南峰のトラバースに入ると、雪が切れ始め、青空が見え出した。隊員の要請で、もう一日の猶予がアタック隊に与えられた。トラバース・ルートまで来て、突然の体調不良に陥った石原は、吉田と共に C3 へ降りるが、一晩で回復して、翌日から暫く放置されていた登攀ルートの復旧工作をすることになる。AC には稲垣、宮本が戻り、薮田も C3 から AC 入りした。

8 月 7 日。快晴の朝を迎えた稲垣、薮田、宮本は 2 時間半の容易な登行で、9 時にアプサラサス主峰に初登頂した。

お　わ　り　に

今回の主峰登頂は、最後に訪れた好天に負うところが大きかった。アプローチから登山期間の前半まで、安定した好天が続いた。登山期間の後半に、長期の悪天に見舞われたが、食料を喰い延して、最後に好天のチャンスを掴むことが出来た。その好天は、撤収からアリブランサに下山するまで続き、身心共に消耗しきっていた我々登山隊には天恵の到りであった。

予想を上回る現地での物価、特に輸送費の高騰はわれわれの予算を圧迫した。止むなく計画内容の縮小を計り、カパルとアリブランサで隊荷の一部を残留せざるを得なかった。学術調査用の測定機器類等を山岳地帯まで持参できなかったことは誠に心残りであった。隊員は、輸送に相当な労力を費やし、これは輸送費の節減に役立つと共に、高度順化の為に良かったと思われるが、長期にわたり過ぎて、疲労の蓄積を招いた。また、結果論ではあるが、もう少し敏速に隊荷の輸送や登攀を行っておれば、悪天候が始まる前に登頂するチャンスに恵まれた可能性もある。当初目標の全員登頂は成し遂げられなかったが、主峰に 3 名、南峰に 2 名が登頂し、全員が 7,000m の高度を経験するという一応の成果を収め、全員無事に帰国できたことは幸運であった。

＜記　録　概　要＞

活動期間　1976 年 5 月～8 月

目　　的　アプサラサス初登頂

隊の名称　大阪大学カラコルム遠征隊

隊の構成　隊長：三沢日出夫（36）、副隊長：石原敏雄（28）
隊員：栗原完治（33）、稲垣佳夫（28）、薮田勝久（25）宮本敬正（21）、吉田真三（21）
医師：三木哲郎（25）
連絡将校：MO BASHIR AHMAD（23）

行動概要：5 月 21 日にカパル発、サルトロ河、ビラフォンド谷を経て、6 月 1 日にナラム着。ピラフォンド峠を越え、シアチェン氷河を横断して、6 月 26 日にテラム・シェール氷河上に BC（5,200m）を建設。7 月 3 日に C1（5,700m）、7 月 20 日に C2（6,200m）、7 月 27 日に C3（6,700m）をそれぞれ建設。7 月 28 日、C3 より石原、吉田はアプサラサス南峰（7,117m）に初登頂。8 月 4 日に AC（7,000m）を建設。8 月 7 日、稲垣、薮田、宮本はアプサラサス主峰（7,245m）に初登頂。8 月 14 日に BC を撤収し、往路を引き返して 8 月 24 日にカパルに到着。

C1 からアプサラサス西面